

森田文庫をめぐる人々

——江戸最後の文人像——

安田吉人

一 森田文庫の概観

福生市郷土資料室収蔵の森田文庫は、市内に在住される森田家に代々伝来してきた書籍と肉筆資料である。

森田家は、慶長年間に京都三条烏丸森田家から当地に入ったと伝えられ、御当主宗旦氏で十四代を数える。森田家の家業を正確に遡ることは難しいが、一昨年他界された殷史翁のお話しによれば、寺子屋を家業とし、十一代目綱吉の妻はるの代までは、私塾「中福生大学」を営んでいたとのことである。教育と文化に親しむ森田家の家風を考えれば、後に横浜俳壇の草分けで、名流松原庵四世を名乗る俳人森田友昇を輩出したのも頷ける。

森田文庫の資料は、このような森田家の家風を反映し、幕末から明治初期にかけての教育・漢籍・俳諧の大きな三

つのジャンルから成り立っている。残念ながら文庫の資料は、いつ森田家に入ったか明らかでないものが多く、碩学であられた先代殷史翁が収集された品もかなりあったように、明治期の蔵書の原型がそのまま伝わっているとはわかりにくい。むしろ、森田家伝来のものに殷史翁の蔵書を加えた、殷史翁の文庫と呼ぶ方が適切かもしれない。

しかし、蔵書からは明治初期の森田家の様子を充分推測することが可能である。例えば教育書は、『商売往来』・『千字文』等の手習いのテキストや珠算の練習帳が多く、きわめて初歩的かつ実用的な教育が施されていたことがわかる。同時期の私塾に見られる四書五経の類は必ずしも多くなく、「中福生大学」では、近隣子女の生活に密着した初等教育が行われていたらしい。また、俳諧と漢籍の書籍

の関係からは、すでに日常親しんでいた俳諧の教養基盤の上に、より高度な漢詩文の教養が加わっていったことが知られる。そして、この傾向は森田家に限らず、近世末期から明治初期の、近隣庶民の教養の形成過程をも現していると思われる。

次に肉筆資料について概観してみると、漢詩文の軸物（七七点）と、俳諧の短冊（一四七六点）の点数が際立っている。地元の拜島村を詠んだ大田南畝の漢詩を筆頭に、山東京伝ら江戸後期の文人。大窪詩仏から大沼枕山にいたる江戸・明治を代表する漢詩人。明治屈指の女流画家奥原晴湖。そして、幕末のおびただしい俳諧作者など、肉筆資料を並べただけでも文学年表ができるのではないかと思えるほど充実している。ともすれば散逸しがちな幕末から明治の資料を、一箇所で大量に所蔵している点に、森田文庫の第一の価値を認めることができる。

本稿では、以下森田文庫をめぐる二人の文人を紹介して、文庫の性格を浮き彫りにしたいと思う。

二 森田友昇

森田友昇は、天保五年福生村に生まれ、明治十八年に五十二歳で没している。まさに幕末から明治を生き抜いた人物である。

友昇が俳諧に親しみ始めたのは、まだ福生村で暮らして

いたころである。江戸の周縁部にあたる多摩地域は、文政・天保期になると豪農たちが新しい経済活動を始め、同時に都市の文化を積極的に吸収するようになる。そして、このような文化への欲求の高まりを充たすものとして、最も親しみやすかったのが庶民の文芸俳諧であった。当地での早い時期の俳諧流行を物語るものとしては、石川家に残る玉石亭梅里（安永七年～天保十一年）の資料が挙げられるが、友昇は多摩地域にすでに根づいていた俳諧流行の地盤の上に育ったのである。

「森田友昇は、武蔵の国玉川の涯、多摩の里の人なり。少時、経史を学び、しこうして性俳諧を好む。その道を田村氏に問い、しかる後江戸に來たりて、業を富所西馬の門に受く。」（『浅川集』序。原文は漢文）。友昇が最初に俳諧を学んだ田村氏は、福生村の名主田村家の友甫である。

海近く夜明る町の余寒かな

山吹や月の入さのしとやかさ

夕かげの遠くあかるき花野かな

諸集に見る友甫の句は、独特な繊細さ・優美さを持ち、その俳諧の資質には注目すべきものがある。この友甫に俳諧の手ほどきを受けたことは、友昇にとって幸運だったと思われる。その後、江戸の著名な宗匠西馬に入門した友昇は、仕事の関係で横浜に居を構えることになる。そして、横浜こそが俳諧作者として友昇が世に出発点であった。

以下、友昇の現在知られている三編の著作集を順次紹介しながら、俳諧師としての活動を追ってみよう。

(一) 『高むしろ集』

友昇が俳諧作者として世に名乗りをあげたのは、明治三年刊行の撰集『高むしろ集』である。この半紙本の一冊は、質量ともに江戸時代の俳諧撰集になんら見劣りしない。當時を代表する江戸の宗匠月の本為山・菊守見外の序で巻頭を飾り、前半を友昇中心の六つの連句、後半を全国から寄せられた発句で構成している。発句の投稿形式による月並とも言うべき連句に前半部を費した『高むしろ集』は、江戸時代の正統的な俳諧撰集の風格を保っている。

序を寄せた見外は、『高むしろ集』の意義を次のように述べる。

士人は大かた産業にのみこゝろを奪れ、さらに連俳にこゝろぞすものすくなし。そが中に友昇なるものあり

て、此道に心をゆだね、一冊子をものし(以下略)

開港以後、またたくまに日本屈指の貿易港となった横浜は、商店が軒を連ね、働く人々が集まる一大経済都市に成長していた。始めは友昇自身も貿易関連の生糸問屋の支配人として、横浜の経済社会に身を置く一人だった。しかし、人は集まるが、産業目的の新興都市であるだけに、とても風雅な道にまで及ぶ余裕はない。その横浜に、友昇はこの

『高むしろ集』で、俳諧の旗揚げを試みたのである。友昇周辺の手によって書かれた跋文にも同様の趣旨が語られ、友昇と俳諧仲間の強い自負と意欲が感じられる。

では、実際に『高むしろ集』にはどのような句が収録されていたのだろうか。文明開化期の横浜をイメージすると、我々はいよいよ新しい文化を詠み込んだ句を考えてしまう。事実、森田文庫に収蔵されている幕末の俳諧師此一の手紙(慶応三年)には「有節之俳諧に蒸気船をもちひ、乙也が其真似をして大砲隊を出し申候。いかに新奇をきそひ候とも、あまりの事に有之など申参候」と、文明開化の新しい事物を用いることばかりに熱心な俳諧師たちの当時の風潮も伝えられている。しかし、『高むしろ集』には、こうした句はほとんど見られない。たとえば、『高むしろ集』には、こうした句が巻いた半歌仙では、

夜の雨に願ひのとゞく土用かな

友昇

草とりすます稲のすゞ風

子紹

湯浴して端居たのしき頃なれや

愛海

(中略)

曲らずに墨を擦のが親ゆづり

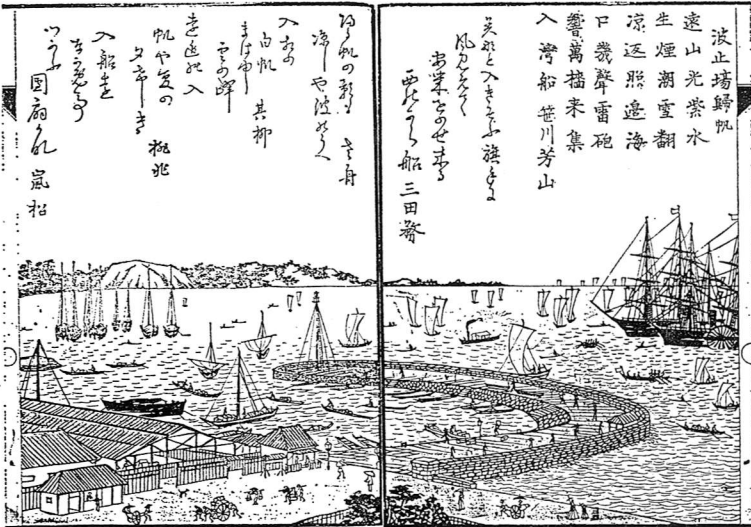
月采

たゞ見馴ねば袴たゝめぬ

友昇

などの句が見える。日常生活に見出す風雅と庶民的な情を連ねる歌仙は、近世の俳諧の風情そのままである。わずかに、この集に見られる明治の匂いは、

〔資料①〕 森田友昇編『横浜地名案内』



波止塙歸帆
 遠山光紫水
 生煙潮雲翻
 涼返照遶海
 口幾聲雷砲
 響萬播未集
 入湾船 笹川芳山

笑迎と入まきと強きと
 帆をたたく
 舟草をのせよ
 西たつて船 三田啓

舟の帆の影り き舟
 海にやはらぐ
 入ち
 白帆 共柳
 まはち
 その岸
 志遠地入
 帆や雲の
 タチキ
 入船ま
 ちるま
 つら
 国へんれ 氣相

● わらはるゝほどたまる雑誌 友昇

江戸の気のまだうせきらぬ関外前 見外

● 東京紫の地の袖が浦つゞき横浜に住す

などである。これらも、どちらかというといふと江戸を回顧したり、名物「江戸紫」の語を意識したものであり、積極的に新しい開化の世を採り上げたものではない。前に述べた伝統的な撰集の形式と考え合わせると、『高むしろ集』はかなり意図的に、江戸時代の様式を守ろうと努力したのではないかと感じられる。友昇は決して新時代を否定する人間ではない。産業に腐心するあまり、風雅をおろそかにしてきた横浜の地に、俳諧の門を開く意気込みが、かえって新時代と逆行する撰集を作らせたのかもしれない。

(二) 『横浜地名案内』

友昇が新しい時代に否定的でなかったことは、明治八年刊行の『横浜地名案内』でも知られる。当代注随一の文人大沼枕山の題言を巻頭に据えたこの書は、前半が絵入り横浜八景(資料①参照)の漢詩・和歌・俳諧、後半が友昇作の横浜地名案内からなる。

横浜八景には、横浜を代表する漢詩人平塚梅花、『西洋道中膝栗毛』の著者仮名垣魯文などの多彩な顔触れが並ぶ。挿絵には、蒸気船・人力車・洋装の人々などの姿が見え、新時代の息吹が感じられる。

そうした趣は、友昇の作った横浜地名案内にはいっそう

色濃い。

明あきらけく治る御世の春の日の、豊かにつゞく横浜の市の衢あきは縦横に、薨あき並べて錐の立処も見えず本町の、北に南に仲通、富貴の町と人の呼ぶ、弁天通り殊更に、夜を日に継て賑はしく、業あき励む海岸は、日に千艘も万艘も、入船出船絶間なく、東西波止揚輸入荷や、輸出荷物を運送の車靴音波の音（以下略）

調子のよい地名尽くして、跋文の言葉借りれば、この一冊を読み通すことで横浜中の地名を覚えることができる。引用部以外にも、電信機・鉄道寮・瓦斯・蒸気車・裁判所・製鉄處・商社などの目新しい言葉が次々と登場し、文明開化期の横浜の繁栄が伝わってくる。横浜を謳歌する友昇の地名案内は、その経済社会のただなかで生きてきた編者の、横浜への愛着が籠められていよう。

（三）『浅川集』

明治十三年、友昇は蕉門の名流松原庵四世を継ぐことになる。『浅川集』は、その松原庵襲名記念の俳諧撰集である。先の二集に見られた交流の広さから、友昇は横浜の風流人として確固たる地位を築いていたと推測され、襲名に遜色はなかった。

『浅川集』の序には、松原庵の由来と友昇が嗣号する経緯が詳しく語られている。

寛政年間、女流俳人星布尼は、八王子の芭蕉が滞在し

た跡を慕って庵を構えた。名を松原と言う。それはかつて芭蕉がここで詠んだ句にちなんでの命名である。

（中略）星布尼が没してから、今隔たること六十六年が過ぎた。以後松原庵の号を嗣いだ者は二人あったが、その後はすっかり絶えてしまった。去年戊寅（明治十一年）の春、八王子の郷人、谷合・田野倉・成合・小沢・岡本・田村・川口の七氏が、友昇を招いて言った。あなたは俳諧を好み、かつまた年齢も四十を過ぎた。家業は子供に任されて、ぜひとも俳諧で生計を立てる生活をなさってください。七氏が周旋して松原庵を嗣いでいただけこうと思いがいかでしょうか。友昇は喜んでこれを承諾した。

（原文は漢文。現代語訳した）

友昇嗣号の経緯を事細かに報じているが、ここにはいくつか興味深い点が指摘できる。一つは、松原庵の初世をあたかも星布であるかのように記述している点である。「松原庵」の号は、すでに星布の師白井鳥酔が名乗っていたもので、師の没後兄弟子の幹雄の後援で星布が継いだのである。しかるに、『浅川集』の序には全く鳥酔について触れられず、芭蕉の発句「西行の草鞋もかゝれ松の露」（『笈日記』）には、大垣の画賛の部にあり、当地とは無関係）と直接結び付け、星布が庵を建てたとしている。しかし、私はこれを故意に真実を歪曲したものと考えるべきではないと思う。

ここには、八王子の俳諧愛好者の中にある星布への特別な
思い入れが籠められているのだ。『昭島市史』によれば、
八王子を中心とした多摩地方に俳諧を広めたのは星布であ
った。「松原庵」の号は多摩の俳諧の拠点として、常に星
布の名とともに記憶されなければならなかったのである。

次に興味深いのは、友昇に松原庵嗣号を周旋した七人の
人物である。彼らは皆八王子の裕福な実力者だった。友昇
に白羽の矢が立ったのは、郷土出身の俳人というだけでな
く、文芸上の交流と平行して、上州から横浜にいたる「絹
の道」の商業情報における結びつきがあったためかもしれ
ない。彼らと友昇を結び付ける具体的な証拠はないが、友
昇が故郷を離れた後も、なお福生の友甫と交流を持ち続け
ていた点からも推測はできる。

このような成立事情の『浅川集』は、当然名流の嗣号記
念にふさわしい大規模な撰集でなければならなかった。序
は平塚梅花の文を、神奈川の自由民権運動の指導者石坂昌
孝が書した。跋文は有力な俳諧宗匠三森幹雄と、人気の女
流画家奥原晴湖が寄せている。多方面にわたる文化人と、
地方経済人の両者から友昇は支援を受けていたのである。

麗やあき川ながら富士の影

友昇

柳見越しの広き松原

清幽

友昇の発句で始まる百韻連句は、百句すべてを別の作者が
詠み連ねている。『高むしろ集』が、友昇と数人の仲間(連

衆)で巻いた連句を中心に収録したのに対し、『浅川集』
はできるだけ多くの作者を入集させようとしている。また
発句の部も同様の姿勢である。参加者が多いことは、その
まま嗣号披露の目的を果たすことになるが、それは、友昇
が自らの作品をもって風雅を世に示した『高むしろ集』と
は根本的に性質が違ってくる。句の出来ばえよりも、入集
者の数に重きが置かれていたに違いない。

しかし、だからといって『浅川集』の価値が下がるもの
ではない。かえってそれゆえに、当時の庶民のありのまま
の俳諧を反映しているとも言えるのである。

● はつ 裕雨の匂ひもひと風情

止山

● 魚市はさみだれしらぬ勢ひかな

完鷗

これらは、人事と自然を巧みからめて把握した佳句であ
る。

● 鶯や啼かば聞うといふ内に

連水

● 笑ふ人ほめる人あり雪丸げ

夢外

● 煙草より茶よりも先の団扇哉

家内喜

など、表現的には稚拙な句の方が多いが、素朴に庶民の感
情を詠むこれらの句には、肩に力の入らないほのぼのとし
た良さも認められる。

● 古郷に草庵を設けて

武蔵野や月も竹馬の友こゝろ

友昇

巻末の友昇の発句には、故郷に戻ってきた懐しさと安らか

さを感じられる。「月も」の語は、自分を暖かく故郷に迎えてくれた人々への挨拶が主であることを示す。『浅川集』に寄せられた多くの句は、拙い友昇にとって「竹馬の友」の懐かしさを感じさせてくれるものだったに違いない。

ところで、この嗣号披露には『浅川集』と別に、もう一つ記念興行があったことが「松原庵嗣号披露惣評」という一枚の刷物から知られる。これは、春潮・幹雄らの著名な宗匠が、寄せられた発句の中からそれぞれ三席までを選んで一覽表にしたものである。形態は、不特定多数の作者が入選を競い合う月並句合と同じと考えてよい。しかも、選者の顔触れから判断すれば、かなり大がかりなものであったらしい。

つまり、友昇の松原庵継承に際しては、伝統的な俳諧撰集と幕末から著しく流行した月並句合の両方が行われていたわけである。この友昇の嗣号披露は、俳壇の過渡期の様相を示しているのかもしれない。明治三十一年刊行の松原庵六世の披露記念集が、巻頭と巻末だけ撰集形式を残し、中身は全くの月並返草集であったのと比較すると、友昇の時代には両者を区別する意識がまだ明瞭だったと考えられる。月並は当時の俳諧師にとって大切な収入源であった。森田文庫の俳書を例に取っても、明治の半ばまで、半紙本の分厚い撰集と数丁の手軽な月並返草集が共存している。

手間や金銭的な面を考えれば、江戸期の俳諧撰集形式は損である。しかし、それでもなお、伝統の撰集形式にこだわりの続ける時代の曲がり角に立たされた明治初期の俳諧師の姿が、友昇を通して見えているのではなからうか。

三 大沼枕山

時代の分岐点に立たされていたということでは、大沼枕山も同じである。枕山は幕末から明治の、漢詩文が最後の輝きを見せる時代の、東都第一の漢詩人である。森田文庫には枕山を中心に、同時代の漢詩人の肉筆物が多数収蔵されており、文庫の特色の一つになっている。

枕山が最初に作品を刊行したのは、天保九年の『房山集』である。幕末漢詩壇の大家菊池五山は序を寄せて、二十一歳の枕山の才能を「まことに畏べき也」と評し、当代で彼に勝る者は梁川星巖と塩田随齋のみだとしている。その随齋もまた、五山と星巖の後継者は彼を置いて他にはないと最大級の賛辞を贈っている。幕末の大家を唸らせた枕山は、以後期待どおりの活躍をし、次々と意欲的な漢詩集を刊行する。嘉永二年には下谷吟社という詩社（詩人仲間のあつまり）を開き、江戸漢詩壇の一大拠点を築く。信夫恕軒は「年僅かに三十。鬱として一家を成す。下谷吟社の名、隆々として海内に震う」(『恕軒遺稿』原文は漢文)と、枕山の当時の影響力を述べている。森春濤が漢詩文の新風を説

〔資料②〕 大沼枕山編『東京詞』。図は奥原晴湖画。



き、明治八年に『新文詩』という投稿誌を刊行して人気を得るまで、枕山は星巖亡き後の江戸漢詩壇の第一人者の地位を守り続けた。

枕山が文明開化の明治の世をどのように捉えていたかは、明治三年刊行の『東京詞』から推測できる。この本は、折本の書型で、十面の絵（資料②参照）と三十首の枕山の漢詩から成る。絵は奥原晴湖・服部波山ら、書は関雪江・市川万庵ら一流文人が筆を執っている。当代文化人の中心にいた枕山でなければ叶わぬような豪華な執筆者を揃えた中で、枕山は自由に筆を揮った。

烟火初番、二州を照らし。

群公、公退、涼楼に倚る。

柳橋の名妓、多く召を辞し。

別に赴く、風流大守の船。

（原文は漢文。書き下し文に改めた）

これは、意気地のあることで有名な柳橋の芸者が、花火見物にやってきた羽振りはいよいよが野暮な新政府のお偉方を袖にして、風流な旧幕府の貴人の舟に行くことを詠んだものである。幕末の文人にとって隅田川周辺は、ことあるごとに風流仲間と遊んだ、平和で粋な江戸の象徴である。枕山もかつて同じ花火の詩に「両国の繁華、天下になし」と詠み、最大級の賛辞で誇った場所である。しかし、時代は変わり、枕山の愛した墨堤は新政府の成り上がり官僚によつ

て蹂躪されている。それを目の当たりにする枕山のやりきれない思いが、柳橋の芸者のこうした行動を描かせたのであろう。

枕山は『東京詞』の中で、天皇が江戸に入り江戸がいつそう繁栄することを歓迎している。しかし反面、青臭く、遊興にばかりふける新政府の役人に厳しい目を向け、地位にこだわらぬ清廉な人物はいないのかと嘆きもする。人々が軽佻浮薄な新風俗に染まる中で、力士と芸者だけが伝統を守っていると讃える。枕山の維新への悲憤は「中興の初、いやしくも一芸を負う者、争い出でて官に就く。先生退然、門を杜じ客を謝す。あえて権貴に媚びず」(『恕軒遺稿』)という生き方で実践されている。

しかし、枕山は『東京詞』が原因で、政府から糾問を受けた。成島柳北の『柳橋新誌』が発売禁止の処置をとられたのは有名だが、枕山にも新政府の圧力が加えられた。^{注4}それがどの程度のものであったかはわからないが、枕山は以後『東京詞』のようなまとまった形で社会風刺の詩を残してはいない。

明治十一年、枕山は『江戸名勝詩』を刊行した。これは「江戸」の題が示すとおり、旧幕府時代の名所だけを集めたものである。

堺町

徽号三升、劇場を圧す。

人を照らす巨眼、自ずから煌々。

衆声喝采、日本一。

簡是市川団十郎。

これは、天保十三年以前の七代目市川団十郎の雄姿を詠んだものである。これが、過去の原稿を録したのか、追想のもとに作られたのかはわからない。が、明治も十一年を過ぎたころに、新しい東京ではない江戸懐古の詩集を出版したことを思うと、『東京詞』がいつそう枕山の生涯のなかで特別の輝きを放った作品として浮かび上がってくる。

枕山は二度と『東京詞』のような作品を上梓しなかったが、枕山の漢詩への情熱はいささかも衰えてはいなかった。枕山の晩年を、永井荷風の『下谷叢話』はかなり寂しいものに描いているが、確かな文章と詩作に対する真摯な態度は生涯失われなかった。現存する枕山の往来書簡には、^{注5}依然として漢詩壇の重鎮と人々から慕われている様子と、漢詩作品への厳しい態度が伺える。枕山の内に秘めた江戸への思いは、理解されにくくなりつつあった漢詩文への執心と、終生結い続けた鬻に託されていたのかもしれない。

森田友昇も大沼枕山も、江戸から明治という、大きな時代の交革を経験し、その中で自らの風雅を生かそうとした文人である。彼らの姿は、時代の変化に圧倒され、迷い、苦しみながら文学のありようを模索していた、明治初期の

文人たちすべての姿でもある。

友昇・枕山を筆頭に、周辺の文人たちの作品を収めた森田文庫は、時代の曲がり角を生き抜いた人々の息遣いが聞こえてくる文庫なのである。

(付記)

森田文庫は、森田氏の高邁な志によって、福生市に委ねられた資料である。先祖伝来の蔵書を手放されることは、筆舌に尽くし難い思いもおありであろう。しかし、福生市郷土資料室を中心にそのお心に精一杯お答えしている。空調の整った収蔵庫・桐製の保存箱といった設備によって、書籍はおそらく半永久的に、我々の子孫に伝えられるであろう。しかも、展示・目録化などによって、書庫に眠るのではなく、生きた資料として再び活用されている。少しずつだがその反響によって『大沼枕山来簡集』などの新しい成果も実りはじめた。森田文庫を中心に、新しい学問の輪が広がることを、資料を愛された亡き殷史翁もきっと喜んでくださるに違いない。筆者は、一人でも多くの方に森田文庫の存在を知っていただき、さらに有効に活用されることを願って止まない。

なお、本稿は平成元年十一月、福生市郷土資料室で開催された俳文学会東京例会の口頭発表に補正を加えたものである。原稿化に際し、郷土資料室、都立農林高校多田仁一

氏に貴重な助言を賜った。

注1 詳細は『森田文庫資料目録』（福生市教育委員会編。昭和六十二年）を参照。

注2 『多満自慢石川酒造文書二』（多仁照廣編。昭和六十一年）参照。

注3 友昇と枕山の交流を直接示す書簡などは発見されていない。しかし、北多摩郡中藤村真福寺で開催された書画会の引付（案内状）には両者の名が見られ、著名な文人同士としていくつかの会で同席した可能性は高い。また、友昇の師西馬は漢詩作者としても枕山編の『同人集三編』（安政二年）に入集しており、師を通じて面識があったとも推測できる。

注4 『大沼枕山来簡集』（福生市郷土資料室編。昭和六十三年）に収録される、静岡方廣寺の松久禹門の書簡から、『東京詞』が「廃却」を命じられ、事件が文人仲間に深い関心を持たれていたらしいことが伺える。

注5 埼玉県東松山市にある了善寺には、弟子の嵩古香に宛てた二百余点の枕山書簡が現存している。

（やすだ・よしひと 音響技術専門学校講師 新宿区在住）